

近くて遠いライバル —アディダスVSプーマ—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

仲のよかった兄弟が訣別してふたつの世界的なスポーツブランドが誕生した。ドイツのダスラー兄弟として知られる兄のルドルフ(1898-1974)はプーマ、弟のアドルフ(1900-1978)はアディダスを創業し、オリンピックやワールドカップの舞台裏で市場競争の火花を散らす。スター選手を広告塔にするという現在では定番のコマーシャル活動も彼らが始めた。

袂を分かつまえのダスラー兄弟はヒトラー政権の台頭と共に共同経営の会社を発展させた。だが第2次世界大戦終結後、ふたりは別々の道を歩き出す。戦時中にいったい何が起こったのか。

世界を巻き込んでスポーツ産業勃興の導火線となった骨肉の争いに迫ってみよう。

二人三脚による快走

ダスラー兄弟はドイツ・ニュールンベルグ近郊の小都市ヘルツォーゲンウラハで靴職人の父と洗濯屋を営む母の勤勉な家庭に生まれた。靴づくりに独自の才能を発揮していた弟のアドルフは第1次世界大戦に従軍して帰国した兄のルドルフと1924年、ダスラー兄弟製靴会社を設立する。当時は電力不足で備えつけ自転車のペダルを交代で漕ぎながら工房の灯りを確保した。

故郷の街はフェルトの生産地で軍隊用のコートが製造され、郊外の水車小屋に布の切れ端が捨て

られていた。兄弟でそれを拾い集めてスリッパなどをつくり、コストをかけない地道な方法で事業の足

場を固めていく。社交的なルドルフが営業、技術に秀でたアドルフが製造を担当した。

二人三脚の経営は体育館用のシューズを地元の体育協会から大量受注したことで軌道に乗った。体育館では青少年が兵士教練を受けており、ゴム底の新製品が飛ぶように売れて工場を増設する。やがて靴底に尖った釘を打ちつけた陸上競技用のスパイクシューズも開発し、1928年のアムステルダム・オリンピックで多くのアスリートがダスラー製品を使って国際的に認知された。

1930年代にヒトラーが政治権力を掌握するとふたりは揃ってナチスに入党する。アーリア人による国威発揚の格好の手段としてヒトラーはスポーツを徹底的に利用した。そのシンボルが世紀の<民族の祭典>と謳われた1936年のベルリン・オリンピックだ。

追い風に乗ったダスラー兄弟はかつてないビジネスチャンスに勝負をかける。世界最速のアメリカ



ルドルフ

アドルフ

カの短距離走者ジェシー・オーエンスを説得して自社製シューズを履かせることに成功。狙いどおりオーエンスは大活躍し、4つの金メダルを獲得した。巨大な宣伝効果によってスポーツシューズの販売数は年間20万足に拡大し、ダスラー兄弟は新興ビジネスの旗手として脚光を浴びる。

戦争で断ち切られた絆

成功への階段はナチスに忠誠を誓うことで準備された。入党後ふたりは手紙の最後に必ずハイル・ヒトラー(ヒトラー万歳)と書き、ハーケンクロイツ(鉤十字)の押印のあるナチス自動車隊の隊員証を所持していた。とくに熱心だったのは兄のルドルフで弟のアドルフとは温度差があったと伝えられている。

第2次世界大戦が勃発するとルドルフは兵役に赴いた。アドルフはナチス国防軍の軍靴を生産するために残されたという。

終戦時にルドルフはヒトラーの私兵である武装親衛隊に加わっていた容疑で米軍に逮捕された。アドルフもナチスによるユダヤ人弾圧への関与を追求されたものの、ユダヤ系皮革業者と取引していたことや逮捕されそうになったユダヤ人を工場に匿ったという知人の証言で助かった。

ふたりの明暗はすでに亀裂が生じていた絆を一気に断ち切った。約1年後に釈放されたルドルフは弟が密告したという噂を信じていた。疑心暗鬼が蔓延する暗黒のナチス帝国では肉親同士による密告も日常的に行われていたからだ。

1948年、ふたりは会社の資産を細かく分割し、故郷のアウラハ河の対岸にそれぞれ新会社を設立する。河の北側にはルドルフが愛称ルディとダスラーを掛けあわせたルーダを立ち上げ、翌年にはアメリカライオンの俊敏なピューマをイメージしたプーマに改称した。南側ではアドルフが愛称のアディとダスラーのダスをつないでアディダスを創業する。

河を挟んで街はプーマ派とアディダス派に二分された。行きつけの店は明確に分かれ、プーマ派はアディダス派のレストランで食事せず、子供たちは別々の通学バスに乗り込むという珍妙な事態が起こった。両社の社員あるいは家族が結婚する

こともありえなかった。人々はどちらのシューズを履いているか確認するために下ばかり見ているとして皮肉まじりに首の曲がった街と噂された。

輝ける栄光のあとに

分裂後、製造部門の社員が集まって優位に立つアディダスが快進撃を始める。ベルンの奇跡と呼ばれ、西ドイツが優勝した1954年のワールドカップ・スイス大会ではスーパースターのベッケンバウアーを筆頭に選手全員がアディダスを身につけた。アドルフはみずから試合会場に足を運び、フィールドの状態を見極めつつハーフタイム中に靴底を最適なものに取り換えた。

販売部門の社員が中心となっていたプーマも徐々にルドルフ仕込みの営業力を発揮していく。ヘルシンキ、ローマ、東京で開かれたオリンピックではプーマのシューズを着用した陸上選手が金メダルを獲得し、着実にブランド名を高めた。

1960年代になると多額の報酬によってスター選手を囲い込むマネーゲームが加速する。両社の後継者となったアドルフの息子ホルストとルドルフの息子アルミンは1970年、ワールドカップのメキシコ大会でペレ協定を締結する。天井知らずの契約金が予想されるサッカーの神様ペレの争奪戦を互いに控えるという取り決めだった。しかしペレからのアプローチもあって協定は破棄され、結果的にプーマが契約する。決勝戦のキックオフ直前、ペレは審判に合図して膝をつき、世界中のテレビカメラのまえでプーマシューズの紐を結びなおすというパフォーマンスを演じた。

1974年にルドルフ、4年後にアドルフが他界し、30年近くに及ぶ兄弟の確執は終焉した。それでも両社の深すぎた溝は埋まらなかった。

アディダスは1987年にホルストが急死して経営難に陥り、ナイキとリーボックに抜かれて業界3位に転落する。プーマも80年代中盤に失速し、ダスラー家は足並みを揃えたように経営から手を引いた。経営権が移って両社はふたたび復活し、グローバルな規模で発展しつつある。

アディダスとプーマの未来を知ることなく去っていった兄と弟はおなじ墓地に埋葬された。ただふたつの墓標は生前のように遠く離れていた。